

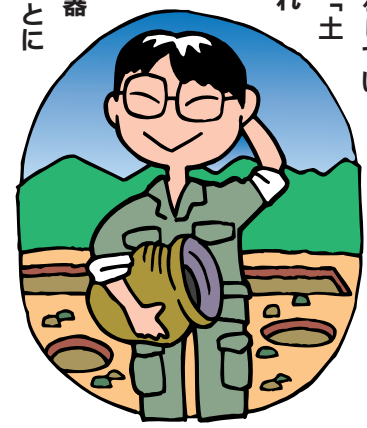
# 焼き物の変遷を追う 土の器一万年の歴史



焼き物には不思議な魅力がある。日常に使う器としての機能以上に、作り手や使う人を魅了して離さない何かがある。焼き物には隠されているのだ……。

おっと矢札、紹介が遅れました。ほくは土器が好きで、島根県で考古学の修行をしています。まだまだ名もない男です。「土器屋」ってみんなに呼ばれています。いつかは立派な考古学者になりたい、と思っっているんですけどね。「ここではちょっとほくの話につきあって、土器の説明を聞いてもらおう」といっしょうじう。

土器が発明されたのは、なんと一万年以上も前のことです。それから現代まで刻々と焼き物は変化しながら作り続けられてきました。ほくたち土器屋は、遺跡から出てくる土器の形や模様、色、固さ、作り方などから、その土器の用途や作られた時代などを一生懸命読みとるのです。そして作る人、使う人の気持ちまでも読みとる……。考古学をやる人って、ロマンチストがけっころ多いんですよ。土器に残されたたくさんの情報を読み取ることで、土器がどんなふうに変化していったかが見えてくるんです。では、これまでにわかった土器の変化を、時代を追って見ていきましょう。



**縄文時代**  
土器を作り始めたのは、縄文時代からです。「縄文土器」は黒っぽくて厚ぼったいものが多く、今のものと比べると、かなり単純で幼稚なものに見えます。でも、このころから人間が豊かな感性を持っていたことがわかります。人間が最初に作った土器には、すでに模様がつけられているんです。

**弥生時代**  
縄文時代の土器は、実に装飾性が豊かです。島根県ではもっとも古いと考えられている土器には、木に模様を刻んだものを土器の表面で転がした模様があります。そのほかにも、縄目をつけたものや、貝を押しついたり、木や動物の骨で模様を刻んだものなど、さまざまな模様があります。縄文時代も終りころになると、縄目をつけた部分と、指できれいに擦り消した部分とに分かれた、「擦消縄文」と呼ばれる模様も現れます。この美しい土器を見ると、人間の気持ちって、このころがいちばん豊かだったんじゃないかと思ったりしますね。

**弥生時代**  
約二二〇〇年前、大陸から米作りが伝わるとともに、新しい土器が生まれます。質素で機能的な「弥生土器」です。縄文土器に比べて固く、色もそんなに黒っぽくありません。煮炊きをする甕、貯蔵用の壺、盛りつけやお供えのための高坏、鉢と用途もしっかり分かれています。弥生時代の終りころに現れる甕の形をした甕を乗せる台は、山陰地方独特のもので、

**古墳時代**  
今から約一五〇〇年前、焼き物作りの革命が起きました。それまでの野焼きではなく、窯の中に入れて高温で焼く「須恵器」の作り方が大陸から伝わったのです。ろくろを使い、色が灰色で固く焼き上がった須恵器は、現在私たちが使っている陶磁器の源流と言えるかもしれません。でもこの時代はまだ、須恵器は一般にはあまり用いられず、古墳に首長とともに入れられることが多いんです。日常生活に使われたのは弥生土器と同様、野焼きで作られた「土師器」です。土師器は底が丸くなるので、煮炊きするときに支える土製支脚やカマド形の土器も出てきます。